

嶼に敵が集中攻撃し、各個撃破を図られるのは戦略、戦術上計算の中に入れてあるのは当然である。南方諸島においても、アリユウシヤンにおいて鳥嶼部隊の多くは玉碎していた。

—終戦時の択捉島の状況—

中、南千島方面兵団はソ連の攻撃を受けることなく終戦を迎え、択捉島の第八十九師団主力は八月二十九日、武器をソ連軍に引き渡した。武装解除はソ連軍の命令により逐次各地に集結収容され、全くソ連の管理下におかれた。一般邦人は逮捕されなかったが、樺太庁等の官吏、警察官、重要な職域の幹部等も逐次逮捕され、更に択捉島においては武装解除、及び移動時、目ばしい私物（時計、万年筆等）はほとんどソ連軍に掠奪されたという。

水漬く屍

—日本海漂流五昼夜—

京都府 増田 豊太郎

軍隊手帳戦歴の一節

昭和二十年三月一日、長崎着、勝邦丸（油送船一万噸十ノット）乗船、同十二日長崎出港、同十七日宇品港着、勝邦丸下船、宇品に在りて待機、同十九日対空戦闘に参加（広島、宇品の空襲）、同二十四日牡鹿山丸乗船、同二十六日門司着、同二十七日対空戦闘に参加、同日出港四月三日羅津着、同月十四日、伏木港着、爾来内地北朝鮮間の船舶輸送掩護に従事す。六月十三日佐渡ヶ島沖に於いて対潜戦闘に参加遭難す。”

この軍隊手帳の中に四枚に破れた補充兵証書がはさまっていて、この余白には、薄くにじんで読み取りにくい小さなペン字がぎっしりと詰まっている。本体験記は、今なめてみるとかすかに塩の味がする軍隊手帳、

即ち佐渡ヶ島沖対潜戦闘遭難五昼夜の日記である。

一日 誌一 第一日

昭和二十年六月十三日午前零時半（実録では零時十三分）敵の魚雷により牡鹿山丸沈没、漂流第一日波静か夕方魚を百匹程取り生食せり。

「牡鹿山丸」の遭難は日本海で五隻目である（三月二十四日命令が変わり、小隊の編成が変わり、乗船初めて若い兵が十数名乗り組んできた。また海軍兵も船尾に一個分隊乗船した）。六月十二日夕刻新潟港出航、夕闇深き佐渡ヶ島を左に見て一路羅津へ、十三日午前零時監視勤務交代、銃剣枕に地下足袋など履いたまま、ごろりと仮眠。ドカンと轟音と共にね飛ばされ、銃剣片手に飛び起き（後で気が付いたら銃剣は他人の物だった）、出ようとしたが見当が狂っている。

壁や人に突き当たること二度三度、少なからずあわてる。こんなことをしていたら船に巻き込まれる。兵員の半数は監視勤務で部屋の奥の方にいたのが出損なつたのだ。とたんに轟音と火柱、お陰様でぱつと出口

が照った。それとすかさず砲座に駆け上がる。鼻をつままれても分からぬという真の闇だがだんだんと様子が伝達される。

初弾が左右から二発後部に命中し、機関部はひきちぎれて、船員と海軍兵は瞬時に海中、第三弾は二番船倉右舷に命中、海水が滝のごとくに流入中である。

ここで対潜戦闘の経緯にふれると、昭和十八年ころまでは、敵の潜水艦も潜望鏡を出してこちらの、のし運動を観測してから魚雷を発射するので被害も少なかったのであるが、電波兵器の開発が進み潜水したままで暗夜、荒天、日中の区別なく攻撃するようになり、輸送船では雷跡の発見より外に防御の方法がなくなり、十九年の初めよりみな撃沈されるようになった。

また陸軍の御用船は百パーセント助からぬようになっていて、程度の悪い船では潜水艦の格好の餌食である。「金華丸」のような優秀船になると（九、三五〇トン、十八・五ノット）、第八中隊長以下全員、外に機関砲、野砲、爆雷、打上阻塞筒等の二百数十名の野砲隊員が乗船、特攻作戦に参加となる。

北支の兵をレイテ島に輸送すること二回、敵航空母艦に捕まり、グラマンF四Fの編隊と戦闘三日間、ついにマニラ湾で沈没（私はこの金華丸に乗船中腸チフスに感染し、香港兵站病院で瀕死の闘病中であつたためこのレイテ作戦には参加できなかった）。

「牡鹿山丸」は機関部の沈没のため電源がなくなり、予備の蓄電池も使用不能。SOSの通信ができぬまま船長は総員退船を決断、船砲隊長は点呼、四十五名の無事を確認。「砲手は照準鏡を、観測手は九四式測高機の眼鏡本体を携行し、一分隊、二分隊、指揮班の順。なお観測手は筏になる物を投下の後退船」と下命した。投下する物もなくなり、船上の人影もまばらになつたころ何んとなく後部が見たくなり、数歩後に向かつて歩いた。すると向こうから人が近づくと、声を掛け合うと、もうとつと下船しているはずの砲手分隊の同年兵で豪の者・田内甚太郎である。「おお増田か、まあ見てこい。後部は千切れてないわ」、いつ沈むか分からぬ船上である。そのまま、一緒に引き返した。私にはとても田内ほどの度胸はない。

甲板はもう二人だけになっていた。海上から杉本上等兵の大声が聞こえる。「おおい皆来てくれ、小隊長がここにおられる」。彼は泳ぎができないので、日ごろ遭難時を心配していた。救命胴衣で十分浮くの。

「寒いぞ！まだ随分高いなあ」などときつかけを失つた二人はなかなか縄梯子に手がからない。そのとき、魚雷第四弾が二人の眼下、船砲隊員の泳いでいる真つ只中に命中し、火葉の香りと水と物が頭上からどつと降り注ぐ。「それ！飛び込め」と二人はあわてて横の方の闇を目掛けて飛び込んだ。急いで船を離れ定石どおり着かず離れず船影を見上げる。またもや第五弾が一番船倉あたりに命中、本船沈没。船が沈むと漆のような闇に海中から首だけ出して浮いている身だ、船のあつた位置が前後左右どつちだったのかさっぱり分からぬ。不安の長い時間が過ぎて、やがて「おおい浮いたぞ、こつちだ、こつちだ」と呼ぶ声をたよりに泳ぐ。

私が初めて出会つたのは大きなタラップだった。これは上等、やれやれ助かつたと一息つく間もなく、次々

と人数が増し沈みだしたので、仕方なくこれを離れたところ、今度はなかなか乗れる物に出会わぬ。何も見えないのだからぶち当らなければ発見できない、やつとハッチの蓋一枚に出会ってこれにまたがった。やれやれ、実に一喜一憂の目まぐるしい連続である。

波は静か、皆それぞれの浮遊物につかまり、無線のできなかつたことなども忘れて何の不安もない。闇の中から声「ああ惜しいことをしたなあ、昨夜のキヤラメルを食っておけばよかつたなあ、石鹸なんぞと換えるんじやなかつた」。「うまいものは背に食え」と言うからな、周囲から失笑。

そのうちに波が出だして朝まで大波が続いた。さあ板子一枚の私などは大変である。寒いので背を高くする、波をかむる度にひっくり返り、その度にしたたかに潮水を飲む。これでは体が持たぬと気付き、寒さをこらえてべつたりと、板子に張りつき、波をかむる度に目と口を閉じる。助けを呼ぶ声が近づく。応ずると藤田古兵だ（大阪の畳屋）。「おお増田か何とかしてくれ、尻をやられた」。しかし私も板子一枚で荒波と悪

戦苦闘中、波にもまれてる内に周囲もだんだん淋しくなり、私一人で流されていた。

夜明けが近くなり幸い波が治まってきた。海上によくもこれだけ浮いたものと驚くほど浮遊物が多い。この中から適当な物を集めて、乗れる物を造らねばならぬのだが、一人ではどうにもならぬと流されながら心はあせる。声を掛けてくれた村田十一君（新潟県長岡市堀金町農業）外二、三人と力を合わせて筏造りに励む。野地板製で四〇センチ角、長さ一メートル五〇センチほどのすかし箱に爆弾形の物が入っている。堅固ではないが浮力の大変すぐれた物を八個ほどつなぎ、その上にハッチの蓋を四、五枚載せた。立派とは言えないが浮力だけは申し分のない筏が出来上がった。上等兵高木久雄（京都東山区綴手新門前町酒販売）、伊藤某（鳥根）、河辺文五郎（東京青梅市野上町二ノ八ノ四）、船員一、海軍兵一、計七名。漂流中随一まれに見る大筏で実に心強い限りであった。板切れを拾い銘々に糧を造りこれで漂流準備完了、休む間もない。次はこの限りなく流れている物の中から食糧になるも

のを拾うことである。

私たちの筏は七人乗りで足が遅く大変有利、軽い物からどんどんと通り過ぎて行く。鵜の目鷹の目、それあれだ、それこつちだと漕ぎ回ること約半日、場所に恵まれなかったか、働いた割には獲物は少なく、筵むしろ包が一個だけ。開けると中は炊事道具一式、子供の玩具が少々。お目当ての食糧は小さな桶につめた粕があり、塩水の入ったところは別の鍋に取り分けて、良いところを喜んで皆でなめた。夕方になり筏にひっかかったまま、半分沈んで流れている先の筵に秋刀魚がむらがり出した。それと皆で手づかみ。バケツと大きな葉缶一杯の大漁であった。

私は料理方、あつらえたように包丁、まな板までそろっている。骨と皮を取りこれをほうばりながら皆で魚をつかむ。皆で食い、奈良漬を仕込む。私たちが偶然行った漁法は大昔の秋刀魚漁法そのままだったそうである。

一日 誌一 第二日

“十四日朝火あり、昨日の魚を煮て食す。本日も晴天波静かなり。午後東方に佐渡ヶ島見ゆ、立ち上る煙を認むる距離なり”

夜が明けて見ると、昨日海水も見えぬほどあつた浮遊物はすっかり無くなり、水平線には、二人、三人と人影のある筏だけが点々としている。寒さをしのぐためか、火を焚きだした筏がある。「おおい魚をやるから火をくれ」と大声で呼ぶ。三隻の筏が漕ぎよせてきて、私たちの筏でバケツに穴を開けて竈を作り鉄帽の火を移し、羽釜に海水をくみ魚を入れる。塩加減も上々。総勢十三名満腹、食い切れなかった。どの筏でもすることは皆同じだ。一番は煙草とマツチの乾燥、次が貴重品袋。私たちの筏では筏作りが手間取り、食糧探しと魚取りで日が暮れたため、魚の朝食が終わって乾燥が始まった。

私は煙草は必要なく特攻兵として「勝邦丸」に乗船したとき、昭南島（当時のシンガポール）までガソリンを取りに行くことになったため、今度こそは最期、鱻の餌と長崎で使い果たしてしまったので一文無しで

ある。貴重品袋の中は身分証明書、家族の写真一葉、四枚に破れた補充兵証書。これを乾燥、胸のポケットにあつた万年筆で半乾燥の補充兵証書の余白に遭難日誌を書くことを思いついた。

一日 誌一 漂流第三日

十五日晴天波静か、本今朝飛行機一機本土に向けて通過すれども、我らを認めず、船舶も通わず、佐渡の見える位置に在りながらいかんともするあたわず、本朝、死体二、三漂流するを見る。南無阿弥陀仏”

飛行機から漂流者など見えるものか、死体の一体は尻を負傷して助けを求めていた藤田古兵、ピツタリと私たちの筏にはりついた。奈良出身の私の同年兵・奥田亀藏は筏をかすめるようにして流れ去る。いま一体は少し離れていたため氏名の確認できず。何か遺留品をと皆口にしながらも、助かる保証はもとよりなく、むしろ地獄からのお迎えか、明日の自分の姿を見せられた思いだ。だれともなくそっと押し流した。

一日 誌一 漂流第四日

十六日晴天、波静か、浪風が出たら終わりだ。食も水も無く、皆々遠く離れて現在九名一緒にいる。今朝はもう佐渡も見えない。十四日夕方羅津入港の予定ゆえ本日あたりは救助に来てくてもよいなどと考える。腹はすいてもまだまだ元気いっぱいだ。波風の出ないことをただ祈るのみ。大分弱音をはく者が出てきた。このままでは百名余の者が折角ここまで助かりながら見捨てられるのか、いかにも残念である。日没西方千メートルの距離に敵潜現れる。”

人ごとではない、私も弱音をはいている。三年兵である。七名中私が一番先任である、皆がたよりにしている、しっかりせねばならぬ。年齢も若いのに比べてら十歳余も上だ。

漂流四日ともなると、皆心身共に弱ってきて昼夜の別無く寝ている者さえある。もうだれも口を聞かない。初めのうちは夜など淋しくなると軍歌など歌って元気を付けて賑やかだったが。一昨日からは水筒の水もなくなりあるのは海水ばかりだ。腹が空いたという感じ

がなくなりただ水が飲みたい。本当に命にかえても水が飲みたい。海水を飲んだら他人の半分も身体がもたぬ、飲んだら駄目だといくら声を荒げてでも飲む者がでる。一度口にしたらもう止まらぬ、海水が辛くなくなるのだから仕方がない。

魚が時々筏にはね上がったり、海中で筏にはさまつて取れるがもう食うことができぬ。口に入れても胃が受け付けぬ。腹の底からげえと戻してくる（これはその後得た知識であるが、体力が無くなり魚が取れても食えぬようになつたら、皮と骨を取り、布でしばつて汁を飲めと書物にある）。

夜など海に落ちたら上がれない。昼間十分に寝て夜は寝ないように、また袴の紐で体を筏にしばれなどと注意しながら夜明けも知らずぐつたりと寝込む。朝日、夕日の時だけ東西南北がわかるが、少し日が高くなるともう方位も分からぬ。朝夕物を投げて潮の流れを計る。日本海の真中は西へ、西へと流れていることだけは分かる。

S O S の通信もできず、日本海の真中を毎日西へ流

されている心細さ、海水と青い空だけを眺めている毎日、そろそろ頭がおかしくなりだす。板切れで漕ぐことが流行、昨日から一緒にいた二人乗りの筏も漕ぎ去っていった。漕いで帰ろうというわけだ。どの筏も漕ぐのが見られる。「漕ぎましよう、漕いでください」という。そこで「私は海辺の生まれだ、櫓で漕ぐ小舟でも人間が歩くより少し早いくらいだ。七人も乗る筏を板切れで、しかもこの潮流にさからつて漕いで何になる。今になつたら、一時間でも、いやたとえ一分でも命長らえて僥倖を待つのみ、無駄に体力を使つてはならぬ」と諭すと一応は納得。しかしどの筏でも漕いでいる。「やっぱり漕ぎましよう、先任がそれでは困ります」「いや駄目なことは駄目だ」と、これの繰り返しである。

二人乗りの筏が漕ぎ寄せて来る。佐光曹長と原田兵長である。おい皆そつちを向いて寝た振りをしていろとそつとささやく。呼ばれてもだれも返事をせぬ。曹長当番の高木上等兵が見つかり、「高木、高木、お前の筏の先任者はだれだ」。もう仕方がない。「おおい

増田漕いで帰ろう」「いいや私の筏は漕ぎません」「もうだれも助けには来んぞ、お前など助かる気が助からん気か」「たとえ助かっても助からんでも漕ぐような馬鹿なまねはやりません」「貴様らのような糞度胸にはしようがない」と漕ぎ去る。そこでまた漕ぎましようが始まる。

薄暗くなるころ、曹長の筏が漕ぎ帰って来た。横目で見ると実にうらやましいばかりの立派な筏に乗っている。先程の潜水艦が敵潜であつたため心細くなり、一番の大筏である私たちのところへ帰つて来たのである。「今夜は一緒に夜を明かそう、敵潜に捕まったらこれで行こう」と軍刀の柄をたたいて士気を鼓舞して見せたが、だれも答えなかつた。筏の構造がちがうので、昨夜や魚のときのようにびったりと繋げない、井桁に組んだハッチの蓋が八方に角のように出ていて、それが私たちの筏をごっつんごっつんとこづく。暗くなるのを待ち兼ねて「高木縄をそつと離せ、朝までやっていたら、こちらの筏はこわれてしまうぞ」。翌朝「あれ、曹長の筏がない」と不思議がる兵を見てにやり、

お陰で上陸後、「漂流中指揮系統の乱れがあつた」とお叱りがあつたが横を向いていた。

一日 誌一 漂流第五日

六月十七日晴天、波静か。暁、飛行機と船を見るも要領を得ず、毎日潮に乗り西へ流れる。山なれば草の根もあり木の芽もあろうに、あるのは海水ばかり。十八時ころ敵潜浮上。昨夜、今朝、昼ごろのものも敵潜と認む。敵潜近航す。五百メートル、三百、二百、百メートル、いよいよこれが最期と同乗七名覚悟を定むるも、幸いそのまま通過西方に退去す。

これで日誌は終わっている。

敵潜浮上、千メートルと書いているが、水平線上に現れた時点では分からぬ。次々と筏を回るので救助船と勘違い、喜びもつかの間、あれ、煙がない、すわ敵潜と皆ぐつと息をのむ。相変わず筏を回りながらだんだん近づく。足の長いのが銃を構えて立つており、ローマ字がはつきりと読み取れるようになる。万事休す。そのとき伊藤が「本当に敵潜ですか」と聞く。だ

れかが「お前あれ見えんのか」と答える「見えたら聞
きません」と怒る。もうそんなにまで弱ったのか。

近航百メートル、真つすぐ私たちの筏に向かつて来
る。「帽章をむしれ！階級章はずせ！」あらためて
皆の顔を見る。潮と潮風、五日間の晴天に焼かれた顔
の皮は半分剥がれており、一晚重油の海を泳いだ軍服
は真つ黒、何とも形容しがたい。

五十メートル、突然一番弱っている伊藤が大声を上
げた。「漕いで逃げよう」「馬鹿漕いで逃げられるか。
ぎゃあーぎゃあー騒ぐな、貴様も軍人ではないか覚悟
せい」突如敵潜は全速で西方に退去。筏の上の私たち
と潜水艦上の敵兵では二メートルの眼高差がある。近
づく駆逐艦を素早く見つけて逃走したのである。やが
て私たちにも煙が見え船体が現れる。今度は本物。元
気者の高木が帽子やタオルで手旗信号「牡鹿山丸遭難
者救助たのむ」艇から「了解」皆手は舞い足の踏むと
ころを知らず。他の表現はないであろう。

「牡鹿山丸」の沈没時、救命ボートは船尾に縛られ
たままで、初弾で海没し役に立たず。伝馬船が一隻浮

上し、これに船長、船員、海軍兵十名が乗り、板切れ
で漕ぐこと四日間、佐渡ヶ島にたどりつきSOS発信。
幸い長崎より帰港中の舞鶴の駆潜艇二隻が舞鶴湾口で
これを受信した。五昼夜過ぎた今日あまり期待できな
いが、とにかくと出てきたのであるが案外多くの者が
元気でいるので驚いている。とのことであつたが夜に
なつたので多くの筏の救助は翌朝に延ばされた。

十九日の朝、能登半島穴水港に上陸し、七尾港で休
養、ここで船員や海軍兵は別行動になつたためその詳
細は不明。船砲隊の生存者は三十名。他は魚雷第四弾
と当夜の荒波のため戦死と認定。小隊長も頭部に負傷
外二名、遺骨箱を受領し半紙に「陸軍〇等兵・氏名
霊」と書いてそつと納めた。当夜の荒波ぐらいが乗り
切れなかつたとはどうしても納得できぬまま「田内甚
太郎霊」と書いた。

藤田古兵は当夜三回拾つてもらえたが尻部負傷のた
めに力つき波に浚われた由。拾つた梅干をなめなめ連
日一人で漕いだ話。二人乗りの筏で「泳いで帰る」と
飛込みそうになるのを一生懸命毎日止めて引つ張つた

者。腰に手を当てた者。大きな辞典をめくる者。銃を構えた兵の立つ潜水艦をピツタリと横付けにされてあわてて海に飛び込み、体力が弱っているため上がってこられなかった海軍兵。引き揚げられて「YOUは兵隊か、何か」と問われ、船員であると答えたが何か大笑いの末蹴り飛ばされて生還した若い船員。七日間の休養が終わってもおかしくなった頭が元に戻らず、あの虚ろになった独特の目付きの直らぬのが二人。休養が終わって十五の遺骨と共に淋しく原隊復帰した。

その後はもはや、乗る船舶もなくなり、福山市の連隊勤務のまま終戦を迎えた。

田内甚太郎は「牡鹿山丸」撃沈の証人として潜水艦に捕虜になり、生きた英霊として終戦後帰還して私の所へ二回尋ねてくれたが、現在は左官業の親方として、姫路市大津区で立派に暮らしている。

遭難漂流者と浮上潜水艦との関係はどの戦闘でも同じであるが、南方海域の戦線ではほとんど自動小銃などで掃射殲滅された。日本海では勝敗も明らかであり、かつ米軍潜水艦が日本海を我が物顔にしている、日

本の海軍も空軍も少しも出動しておらず、全く彼らの優越行動だったと考えられる。

私は昭和十八年、加古川の高射砲連隊に応召したが、そのころは船舶砲兵隊など地方では全く知られておらず、軍装を手伝う使役兵から哀れむように「お前らは船舶行きで鱧の餌だ」と言われても何の事か少しも分からなかった。入隊後三日目の朝、広島船舶砲兵第一連隊に転属、次いで七日目宇品港で「月川丸」に乗船、フィリピンのパナイ島派遣となつて、隊員から「馬鹿は死ななきや直らない。船舶死ななきや帰れない。鱧の餌だぞ」と自嘲するのを聞かされて、初めてこんな部隊もあつたのかと驚いた。いうまでもなく一死奉公を誓い、少なくとも死ぬときは、卑怯未練の振る舞いなくと覚悟はできているつもりであつたのだが、百メートル、百五十メートル離れて魚雷を受けても鱧の餌とは恐れ入った。

陸軍の戦死とは、野戦か陣地で敵弾を受けるものと単純に考えていたのだ。陸軍の御用船の掩護に高射砲を持って乗り組んだ私たち船舶砲兵が、船と運命を共

にして鱈の餌になることは、実に歩兵が散兵線で壮烈極まる散華となんら変わらぬと悟り切るまでには、随分と長く、半年以上もかかったような気がする。

昭和十九年十月の香港の艦船や九龍の造船所のB29の大編隊による爆撃や、二十年八月八日の福山市の壊滅的大空襲にも参戦し、また船舶砲兵第一連隊は、高射砲が十五個中隊、外に機関砲、野砲、爆雷打上拒塞筒等々十二個中隊の計二十七個中隊の大部隊であったが、その兵舎は、掘つ建て、板張り、杉皮屋根と実に粗末を通り越した貧弱さであった。これも十九年十一月福山市の連隊が空家になったのに引つ越しをしたので、二十年八月六日の広島原爆をまぬがれた。

現今でも海上遭難があり、SOS直ちに、ヘリコプター、巡視艇、漁船等が馳せつけても遭難者の発見ができぬことは間々ある。大海で遭難浮遊者を探すことは大地で粟粒を探すに等しい、むしろ見付かる方が不思議なのである。

六月とはいえ荒海の日本海が一週間もの間晴天無風など海を知る人なら考えられぬ不思議の一つなら、佐

渡ヶ島沖で遭難漂流の筏と、五昼夜も過ぎて余り探す気もなく出航した救助艇が日本海の真ん中で真正面に出会う奇跡、皮肉にも必ずしも漕がなかった私たちの筏が日本に一番近くて真つ先に救助されるなど、実に事実は小説よりも奇なりである。

船舶兵として従軍二年余、乗船した輸送船の数は軍隊手帳の記載を見ると九隻。

「黄浦丸」 (ガム島北方十九年五月十四日)

「満州丸」 (ルソン島北十九年九月六日)

「金華丸」 (マニラ港十九年十一月十四日)

「赤城山丸」 (レイテ島沖十九年十二月六日)

「乾瑞丸」 (ルソン島北十九年十二月二十三日)

「牡鹿山丸」 (佐渡ヶ島沖二十年六月十三日)

(一) 内は六隻の沈没位置と年月日を記した。

「勝邦丸」は昭和二十年三月、長崎三菱造船所で竣工し宇品港までの航行だけで終戦。「帝王丸」は第一次世界大戦でフランスより分捕った船だったので、戦後舞鶴飯野造船所で修理して返却された。私が一番初め乗船した「月川丸」については調査が及ばなかった。

船舶砲兵の損傷は大きく、航海ごとに編成替えや乗船替えが行われたため、私の乗船中の沈没は一隻だけで、他の五隻は私の下船後の沈没である。船舶砲兵の遭難経験は普通で、中には二日に三回などというものである。

必死を覚悟して、あまた死線を体験し、九死に一生を得て今日ある身の、あれを思い、これを考えるとき、寿命（運命）の不思議につきあたる。

漂流談をするときよく言う。現今でも、金を十万、二十万円持たされて、好きにして遊べと言われても、五昼夜は長いだろうと思う。救助のあてが百パーセントなく浮遊物に乗り、腰から下はいつも海水に濡れて、見えるのは海水と青い空だけの心境など（もつとも今では私もすっかり忘れてしまったが）、私などの筆舌ではどうても表現不可能であり、また理解もしてもらえない。唯一今でも心に残ることは人の見る目のむずかしいさというか、人間の真価は土壇場にならぬと分らないということである。なかなか思うように書き表しできぬ。ここまで書いて何か忘れてきたようではならぬ

いが、考えても何も思い浮かばず、筆も運ばぬ。どうやらここらが私の文才の土壇場らしい。

（平成二年三月二十二日久美浜病院病窓にて脱稿）

遭難時救命胴衣を装着しておれば、泳ぎができなくとも沈むことはないが、浮いた物に乗らなければ疲労のため十時間以内の命といわれていた。船舶隊員はいつも救命綱を棒状に巻いて銃剣にむすびつけて、海上陸上の別なく身につけていた。「牡鹿山丸」の沈没時は船の関係者以外の乗船者が一人もなかったため犠牲者が少なかったのである。

陸上勤務

昭和二十年六月二十七日、列車にて七尾港を出発、福山市の連隊に復帰したが乗る船舶もなくなり陸上勤務が待っていた。

兵営は福山市の南端に位置し、三方は田圃に囲まれて、北側に陸軍病院や員数屋（軍用品を売る店）の並び兵営街道が市内に続き、真つすぐに北へ突っ切ると山陽線福山駅舎に突き当たる。線路は福山城の内壕跡

を通り、その向こうは高い石垣になり、その上に天守閣の威容が聳える。

兵営の南は瀬戸内海備後灘まで約十キロばかり、ずっと水田が続いている。ここの海岸を通称一文字の堤防と呼ぶ。その名のとおりに、約二キロばかり潮止めの堤防が一直線に石垣でもって築かれている。上下二段、中段に一メートルほどの犬走りをつけて、七、八メートルの高さに積み上げられている。その見事さは本当にほればれとするほどである。

七月中旬この一文字の堤防に陣地が構築されて、高射砲二門と観測機が配置された。この観測班が我が八中隊に割り当てになり、大上班長以下八名が配備された。これがまた実に大変なことだったのである。

陣地占領は終わっても廠舎が無い。朝は弁当を持ち隊伍を組み陣地へ行き、夕暮れに連隊に帰るのであるが、さあそれからが大変なのである。

警戒警報が発令されると陣地まで十キロの早駆けである。「警戒警報発令！」がぱつと飛び起き軍装で、もつとも船舶兵の軍装は簡単だ。銃剣を帯び防毒面と

鉄帽を背負えば終わりである。いち早く陣地に着くため隊伍を組むことなく我先に駆け出す。大上班長と私がいづも先頭である。

「増田お前なかなかよく走るな」「班長もなかなか強いですな」と話しながらくてくと陣地目掛けて田圃道を走る。他の兵はだんだんとおくれる。一度だけ陣地まで走ったことがあるが、いつも途中で警報解除になる。早く走った者ほど余計に歩かねば帰れぬ。昭和初期の名ランナー村社講平さんや、あの泣き顔で走った、世界チャンピオンのザトベックでさえ、お汽車とか人間機関車とか言われたものだ。飛行機相手に十キロのマラソン競争なんて馬鹿らしくてといたいところだが、命令とあつては言葉もない。

福山市というところは警戒警報に関しては大変恵まれていて、四国の今治上空、足摺岬上空と、どちらに敵機が現れても警報が出される。

時は昭和二十年七月下旬である。一晚中飛行機とマラソン競争である。眠る間など全くない。人間とは勝手なものである。どこか弾丸の飛び込んで来るところ

でもよいから少し寝られる所に行きたいなどと思う。ちよūdとそのとき、馬の取り扱い、筵織り、椎茸栽培の経験者を募集する会報が出た。椎茸栽培なら上等とこれを申し出ておいたところ、やがて連隊命令で椎茸上等兵が二名誕生した。

陣営奥の隊長に申告。そこで陣営奥の隊長の申すには「植菌は春まで待てぬ、今年中に終わるように」と、ここでも軍隊流が出る。相棒の上等兵は他中隊の者で、今では名前も思い出せないが栃木県出身で、世の中にはこんなのもいて誠に愉快である。「俺のように四年兵になって精勵賞の一本もないろくでなしだが、四本も五本も並んでいる奴もどうせ役たたずだ。まあ一本ぐらいが良いところだ」などと言ひ、現在までに七、八回は職業を変えたと言ふ。「それでは兵隊業が一番長いわけだ」と言ふと「まあそんな訳で、陣営奥の中尉には秋の植菌も経験があると云つてやつたが、俺の椎茸栽培など屑つばものだ。椎茸の方はよろしく頼む、その代わり俺の特技は賭博だ、これだけは天下第一品だからそのうち教授してやろう」などと笑つていた。ど

ういう訳か、私は妙にこんなのに関心を持たれて、良いコンビが生まれた。

鎌磨山作業班の炊事係が迎えに来てくれて糧秣受領を終わりに、これを背負つて福山市を西はづれて約四キロ、中国山地を水源とする大河芦田川の長い大橋にさしかかる。この地方は日本でも名高い干魃地帯である。昭和六、七、七、七の農村疲弊窮乏の様子を書いた女流文学者の小説などを思い出しながら橋の下を覗くと、なるほど水は一滴もない。川底はまっ白に乾いている。芦田川の水が枯れて水田の水がなくなり、ひび割れて稲がしおれかかると芦田川の川底を二メートルほども掘り下げ、にじみ出る水を葉缶にくみ、家族総出でチヨピリチヨピリと稲株にそそぐ風景などを想像しながら渡り切ると沼隈郡である。

いかにも早魃地らしい名の水呑村に通ずる街道を右にそれて、標高四三〇メートルの彦山を目指す。真夏の太陽がじりじりと照りつける。日中の田圃道を汗をふきふき三キロ、山麓の洗谷部落に至り、区長の小林益一さんの裏山からわき出る清水の甘露を賞でながら

小休止。山の兵隊たちは随分とこのお家にお世話になったようである。

隣村の志田原部落へ越す峠道を途中から左にそれて涼しい^{すず}柚道をたどること半道、彦山中腹の鎌磨山の廠舎に到着。廠舎は大きな手造りで、掘つ建て総女竹造りである。向う側にこれも女竹造りの炊事場と風呂場、これにはドラム缶の風呂桶がすわり、その横には残飯用の小豚が一頭飼育されている。

鎌磨山作業班は班長以下二十六名で、彦山の国有林の一部で連隊の自動車用木炭と炊事、風呂場の薪を賄っているのだ。班長に申告が終わり、これで鎌磨山作業員である。やれやれこれで飛行機とのマラソン競争もなくなり、ゆつくり寝させてもらえるだろう。周囲を見渡せば、なるほど木炭材の伐採跡には小楯の木が沢山椎茸用に残してある。椎茸要員には、ほだ木造りまで間があるので雑務勤務に回り、炭焼きの残材で薪造り。夜記帳があり、数の調査で報告すると、そんなに造っては困ると周囲からお叱り。なるほど山の作業員でも^{木こり}木仕事（木こり）の専門家ばかりではない。米

屋の大将もいけば呉服屋の番頭もいるわけだ。

廠舎の右の屋根を、ちよいと越すと志田原部隊の奥まった一角に出る。大きな堤の用水池があり、丘の田園が開けていて、このあたりは集落ではなく農家が点在している。水田には若い稲葉が風にそよぎ、畦道には泥をまぶした^{いぐさ}藎草が乾かしてあり、畑には煙草が大きく育っていて、絵に書いたようなのどかな風景である。

船舶砲兵も「一寸先は闇、板子一枚下は地獄」の乗船勤務と違い、陸上も山の勤務ともなると格別、風景を賞でる詩情も自らの余裕である。この辺りまでは山の兵隊の行動範囲であり、村人ともあいさつを交わしている。受領した玄米のような米や、「牡鹿山丸」が運んだであろう高粱の搗き直しに、米屋の大将のお供でこの谷間の作業場に通った。糧秣の受領に連隊に帰ると、中隊の兵隊は「おい、うまいことやったな」と祝つたり羨やんだり。顔見知りの士官や下士官は「椎茸はいつでも」と聞く。「一年か一年半先」と答えると、「なんだアメリカさんに食わすのか、そんなこ

とやめてしまえ」と捨てぜりふした。

こんな別天地が二年早くあつたらなあ！と。

この極楽も二十日足らずで終戦。山の作業班も連隊復帰が決定し、前夜決別の宴が盛大に行われ、飼育した豚を屠し、どこからか持ち込んだメチールの酒盛りが始まった。私もちよつとなめて見たがあれはなかなか口当たりがよいものだ。メチールの毒性もまだ知られておらず、皆したたかに飲んだため、その夜は七転八倒の苦しみで大混乱であつたが、幸い翌朝は皆無事に揃つて、それぞれの中隊へ復帰した。

一カ月近く終戦処理勤務の後、俸給十一カ月分、百九十八円、糧秣十日分、被服一揃いを支給されて召集を解除された。船舶砲兵連隊ではよく墓標なき英霊といわれたが、墓標なきなどの段ではない。戦死場所を〇〇島沖とか、〇〇港北方などは良い方である。南方海域などもある。事実、私の中隊でも「建和丸」という船に、昭和十九年三月十日乗船した一個小隊は、香港に向けてマニラ港を出航したまま消息が途絶え、五十名全員終戦まで行方不明の赤札だが中隊事務室に掛

かつたままでいた。

私は武運強くといつてよいのか敗残の兵には武運つたなくといふべきか生還して、つたない体験記をお目に掛けることもできた。先に「船舶砲兵が鱧の餌になることは歩兵の散兵線の壮烈な最後」などと書いては見たが、実はそんな立派なものでなく、ただどうしても逃れ切れない船舶砲兵の宿命とあきらめ切るべく、毎日努力したに過ぎないのかもしれない。いずれにせよ船舶兵はもとより鱧の餌を覚悟の上の乗船であるが、三十万余名の輸送中の將兵は船舶隊員とは違つてある。戦地に赴けば百戦錬磨、一騎当千の武士たちである。

船舶隊も兵員輸送は特に身が引き締まる。不運にして時に利あらず敵の攻撃に屈し、海中に投げ出され、陸戦と異なりなす術も無く、私などの十数倍の苦しみの中、水漬く屍となられた墓標なき英霊たちの無念さを偲び、花を供えるところも、手を合わせる方角すらなく遺骨箱に半紙一片のむなしきなど、御遺族の心中を思うとき、船舶隊生存者としては身の置きどころも

なく、胸のつぶれる思いである。

ただただ水漬く屍となられた多くの墓標なき英霊の御冥福と御遺族のなご一層のお幸せを心よりお祈り申し上げる次第である。

【解 説】

——水漬く屍 日本海漂流五昼夜——

体験記執筆者・増田氏は、船舶砲兵であるが、船舶部隊というと、大部分の人は「あ、砲部隊」と思うし、皆船舶工兵であるごとき錯覚を起こし易い。しかし、戦中輸送船に乗った者は、高射砲や機関砲、甲板に車輪を固定させた旧式野砲を装備し、陸軍の兵隊が配備されているのを見た人は多いと思う。その人たちが船舶砲兵隊員であると思えばよい。

陸上の砲兵は、鞍馬・駄馬・車両（けい引車）をもつて運び、砲列を敷いて戦闘するのである。

しかし、船舶砲兵は陸軍の海兵とし各輸送船に乗り込み、対潜射撃をする。多くの船が今次大戦で、雷撃、爆撃、銃撃、敷設機雷等で沈没し、船と共に海の藻屑

となつてゐる。輸送される兵員はその時限りであるが、船舶砲兵は船と運命を共にする。いつの日か海上で海中で戦没する運命を背負つてゐる。

陸軍の船舶部隊は船舶兵団司令部を頂点に、主たる部隊は次のごとくである。

- | | | |
|-------------------|-------------|-----|
| 船舶輸送司令部 | 五、同支部 | 二六、 |
| 野戦輸送隊司令部 | 一、船舶輸送地区司令部 | 二、 |
| 船舶団司令部 | 七、東京船舶隊 | 一、 |
| 碇泊場司令部 | 二六、 | |
| 船舶砲兵団司令部 | 一、船舶砲兵連隊 | 二、 |
| 船舶機関砲連隊 | 二、船舶情報連隊 | 一、 |
| 特設船舶砲兵連隊 | 一、船舶砲兵教導隊 | 一、 |
| 船舶通信連隊 | 一、船舶固定通信連隊 | |
| 船舶通信大隊 | 六、船舶通信補充隊 | 一、 |
| 船舶工兵連隊 | 三七、船舶工兵中隊 | 一、 |
| 独立船舶工兵中隊 | 三、船舶工兵野戦補充隊 | 二、 |
| 建設勤務中隊 | 六、水上勤務中隊 | 一一、 |
| 特設水上勤務中隊五四、陸上勤務中隊 | | 七、 |

- | | | |
|----------|--------------|-----|
| 汎水作業隊 | 一、海上輸送大隊 | 二二、 |
| 機動輸送隊本部 | 二、 | |
| 高速輸送大隊 | 一、独立海上輸送中隊 | 六、 |
| 機動輸送中隊 | 三〇、同・補充隊 | 一、 |
| 潜水輸送派遣隊 | 一、潜水輸送隊本部 | |
| 潜航輸送艇 | 一〇、陸揚隊 | 一五、 |
| 海上挺進戦隊 | 三〇、同基地隊本部 | 五、 |
| 同基地大隊 | 三〇、病院船衛生班 | 二二、 |
| 海上駆逐大隊 | 二、同補充隊 | 一、 |
| 野戦船舶廠 | 一〇、同・支廠 | 三二、 |
| 同・移動修理班 | 一七、船舶工作廠 | 七、 |
| 機動艇移動修理班 | 一、小型船舶南方回航隊班 | 二、 |
| 船舶整備教育隊 | 一、特設機動輸送隊本部 | 一 |

増田氏乗船の「牡鹿山丸」は、昭和二十年六月十三日、雷撃を受け戦没人員は八名であった。これを合わせ、船舶砲兵第一連隊では計一一九隻、二一、〇七三名戦没である。

また、同第二連隊被害状況は、二六五隻、三、〇三

八名戦没とあり、二個連隊五、一一一名、ほかに比島など各戦線の陸上で約三、〇〇〇名が戦没しているようであるという。

船舶砲兵の編成（発祥）は、昭和十六年八月五日、陸甲第四三号によつて、浜松高射砲第一連隊要員をもつて「船舶高射砲隊」設立による。同年十月十日、陸甲第六二号により「船舶高射砲隊」を「船舶高射砲第一連隊（暁第二九五部隊）」と改称するとともに支那派遣軍の各部隊、内地の高射砲連隊、台湾の高射砲第八連隊から集めた船舶高射砲第二連隊（暁第二九五部隊）を編成して字品に集結して開戦に備えた。内容は第一、第二大隊は高射砲中隊各三、第三大隊は高射砲中隊三個中隊であった。この兵員を陸軍輸送船中の主要船に配備出撃した。

その後、戦線の拡大により兵員増加、装備増強等の改編が行われ、昭和十七年七月三十一日、陸甲第五二号により、船舶高射砲連隊は船舶砲兵連隊と改称されたという。さらに水中聴音機隊、電波探知機隊、爆雷隊、監視隊の増設が昭和十八年春ごろから逐次設置さ

れ、砲兵教導隊、船舶砲兵団等が遅まきながら増設された。船舶砲兵部隊の主要任務は、①輸送間の防空・防潜、②上陸戦闘援護、③泊地の防空であった。

輸送船の兵装は船舶の大小により異なるが、一万トン級優秀船には中隊主力編成で、高射砲四〜六門、高射機関砲四〜八門、野砲一門、六〜七千トン級では小队編成で高射砲二、機関砲二〜四門または野砲一門で、昭和十八年以降は前記水中聴音機隊、電波探知機隊、爆雷隊、監視隊が逐次配備された。

従来、海軍は大艦巨砲主義であり、日本海海戦の夢が捨て切れず、海軍のプライドからか、輸送・商船を攻撃目標とすることをいざよしとしなかったのか？海上護衛に対しても十分の研究対処がなされていないか？と思われる。

これがため、四囲海に囲まれた島国日本は東西南北の戦線へ兵員を運び、物資資源を国内に運ぶ、この単純明快な答えは、船舶・商船の重要性であった。十分な海軍の海上護衛の結果、船舶大戦争により、陸海将兵と船員計約三十万人は敵潜水艦や敵機に撃沈水没

されている。また、これにより八千有余の船舶将兵が戦没され、八〇〇万トン以上の船舶が戦争海難により失われた。